

---

# 東方逢人禄

しゃる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方逢人禄

### 【Nコード】

N4122Q

### 【作者名】

しゃる

### 【あらすじ】

「異変」

一度も負けた事のない少年。

「柊祐介」

彼が幻想郷に誘われ

「八雲」

彼が最後に見たものは

「二人目」

絶望か

「能力」  
希望か  
「想い」  
幻想の住人が最後に見たものは  
「出逢い」  
人か  
「記憶」  
妖か  
「嘘」  
夢か

「柊 裕介」(前書き)

キャラの死亡はたぶんない

ハーレム化するかも

主は初心者です。多少の亀やへたくそで本人にも分かんない文脈が出るかも知れません。

以上の点をふまえてご覧くださいあ。

「柊 裕介」

「…ツマンネ」。

呟く独りの少年。

「またこんなもんか…」

輝き続けるフラッシュの群。

…は聞いてみましょう！勝利の秘訣はなんですか？」

「はい！今日勝てたのは毎日の努力とそれを支えてくれた人達のおかげです！！本当に感謝しています！！」

「分かりました！本当に感謝しているのがひしひしと……。

止まってしまった世界。

「ツマンネ…」

少年は呟く…止まってしまった刻の中で…。

「はあ…」

何でもないのにため息が出てくる。

何時からだろう…

この世界そのものがまるで汚物のように全てが汚れて見えるようになったのは…

今日も学校に行き、授業をサボり、帰るだけの生活。

ふと独り帰り道で昔を想う。

違った筈だ。今と何が…

あの頃は独りなんかじゃなかった。

周りには常に誰かいた。

確かに居たんだ…！！

…何時からだ。いつからだイツからだイツカラダ？

何時から俺はこんなにも…

## 朱と躍る金

「柊裕介だな…？」

柊裕介と呼ばれた少年はゆっくりと振り向く。

「その赤い髪、蒼の瞳…間違いない」

少年は応える

「何の…いえ、誰の事ですか？」

平然と。

「お前は俺ら天山一族を滅ぼした最低最悪のだて…っ！！」  
男は最期までコトバを紡げなかった。

「知ってるなら仕方ないなあ…」

目の前には悪魔がいたから。

その前に既に意識は亡かったから。

静寂の月。血に濡れた地面。横たわる亡骸。佇む少年。見守る金。

少年は尋ねる。

「君も知ってるの？」

「あら、気付いてたの？何時から？」

姿を表したのは、一目見ただけで美人と気づける金髪の女。異様なのは体の半分が何とも形容し難いモノに入っていること。

「ずっと聞きたかった。君は誰だい？」

「ふふふ…何時から気付いてたの？」

…

「あの事件の3日後から。さあ答えてよ。君は？」

「最初から…ね。危険ね、あなた。」  
驚きつつも平静を崩さない女。

…

「あなた、負けたことある？ないでしょ？」

…無かった。

つまらなかつた。大概のことは1年あればトップに立てた。サツカーも…殺し合いでさえ…。  
でも…

「だから何だツツ!!」

少年はどこから出したのか、鈍く光る日本刀を振りかざした。それは一瞬で得物を無慈悲にも切り裂く…



筈だった。

その刃は今地に刺さり、少年は…

「どう？初めての敗北は？」

余裕の表情を崩さない女。

戸惑いを隠せない少年。

「この世界をどう思うっ？」

尋ねる女。

「…」

「どう思うっ？」

「…つまらない」

小さな聲で…

「負けなんて…」

確実に

「勝ち以上につまらない！！」

初めて勝利への執着を見せる少年。

「勝ちたい？」

微笑む女。

「……ああ」

「強くなりたい？」

「ああ！」

「ならあなたを導きましょう。」  
月を背景に

「？」

「幻想郷へ。」

舞い踊る女。

何でも良かった。

強くなれるなら。

何だって…

## 幻想郷

「…なんだこれは？」

なぜか柱に縄で括られ、目が覚めた金目の少年。

目の前には悪魔のような形相をした、赤と白を基調とした巫女服をきた少女。

黒い髪に大きなリボンが印象的である。

「あんたあ！どうしてくれんのよ！！」

何かしただろうか？

「弁償しなさいよ！私の…」

あ、そういえば…

「お賽銭箱！！」

そうだった。昨日八雲紫とかいう女に言われるままに「スキマ」に入ったら…

「いや、僕自身被害者だと思いますよ？」

お賽銭箱の遙か上空だったんだ。不可抗力である。

「じゃあ誰が加害者なのよ」

明らかに不機嫌な巫女さん。

「紫さんかな？」

当然である。気絶してたみたいし。

「紫？どうしてあん…なるほどね。あんた、私と決闘しなさいよ。」

…

「決闘しなさいよ。」

…え？

決闘？闘い？タタカイ？

瞳が

「いいよ。闘ってあげる。」

金から

「ルールは簡単。スペル持っていないでしょ？じゃあ何でもあり、参ったと言わせれば勝ち。」

蒼へ

「分かった。」

変わっていく。

「私が勝ったらあなたが悪い。あなたが勝ったら…」

「おま…」「紫が悪い！」

へ？

それもっ…

紫でよくな？

「まあ俺が勝つから関係ないけどね。」

そういつてどこからともなく日本刀を取り出し縄をほどく少年。

「私は弾幕ごっこでは負けたことないのよ!」  
懐からカードを取り出す少女。

### 《二重弾幕結界》

弾幕が打ち出され、決闘が始まる。

何時もどつりの境内。

温かいお茶。

突然吹っ飛んだ賽銭箱。

白く塗り潰される視界。

元賽銭箱だったもの（木の破片のみ）の中心で気絶している朱髪の少年。

彼がぶつかってきたのは目に見えている。

「…とりあえず縛り上げて尋問ね。」  
近場の柱へ

「よっ…と」

縛り上げ

体を揺らし、起こす。

「…なんだこれは？」

不思議そうな少年。

その当たり前のような行動に何かギレた。

「あんたあ！どうしてくれんのよ！！」

更に不思議そうな顔をする金眼の少年。

「弁償しなさいよ！私の…」

わかった！という顔と困惑した顔を同時にする。

「お賽銭箱！！」

思いをすべてぶちまける。

賽銭箱：

たくさんのお恵みを私に与えてくれた。

賽銭箱：

ここへ訪れた者たちの神への感謝。

賽銭箱：賽銭箱：賽銭箱！！

「いや、僕自身被害者だと思えますよ？」  
イラッ

「じゃあ誰が加害者なのよ」

怒りを精一杯押し込めて放つ言葉。

「紫さんかな？」

「紫？どうしてあん…なるほどね。あんた、私と決闘しなさいよ。」  
見慣れない外見。

飛んできた人間。

紫が此処に飛ばした意味。  
すべてわかった。

あの妖怪とは長い付き合いだから。

「決闘しなさいよ。」

コイツがただ者じゃないってこと。

「いいよ。闘ってあげる。」

少年の瞳の色が蒼に。

（ほら、普通の人間じゃなかった。）

「ルールは簡単。スペル持っていないでしょ？じゃあ何でもあり、参ったと言わせれば勝ち。」

見極めなければならぬ。

「分かった。」

どんな能力なのか。

「私が勝つたらあなたが悪い。あなたが勝つたら…」

幻想郷に迫る脅威から守る力があるのか。

「おま…「紫が悪い！」

賽銭箱は守れなかったが。

「まあ俺が勝つから関係ないけどね。」

すごい自信だ。

これじゃさつきまでとは別人のようだ。

どこからともなく日本刀を取り出し縄をほどく少年。

今のが能力？

なにか特殊な剣なのか？

「私は弾幕ごっこでは負けたことないのよ！」

最初から本気でいく！

これでやられるなら紫の期待はずれ。

何より…

《二重弾幕結界》



お賽銭箱！！

## 禁じられた能力

「…ッッ」

放たれる弾幕の群。

回避しつづける一人の少年と、弾幕の中心にいる少女。

しかし、少年からは疲労感が感じられない。

逆に霊夢のほうが疲れているくらいだ。

「なんなのあなた。全然攻撃してこないのね。」

静かで

「…よ。」

今にも消えそうな聲の

「…なに？」

絶対的な勝利宣言

「攻撃なんてしねえよ。そしたら、つまんだらどう？」

「…あなた、私を舐めてるの!？」

一旦攻撃を止め、次のスペルカードの準備をする紅白巫女。

「そつとも言うかもな？」

刀を鞘にしまい、余裕すら魅せる少年。

「なら!！」

《夢想封印》

最後の弾幕が地面にぶつかるようにして消える。

「ハア…ハア…」

息を荒くする霊夢と、反対に楽な顔をする柊。

「流石博霊。俺も避けるのが精一杯だったぜ。」  
言葉とは逆の表情。

「あなた、避けるだけで勝てるっても!?」  
弾幕が当たらずに、苛立つ霊夢。  
こんなことは初めてだ。

「ああ。」  
違う。

「避け続ければ勝手に消耗して一撃で倒せる。」  
それじゃ、私の目的は -

「それに、君の目的にもかぶらない。」  
「!!!!!!??????」

「…私の目的?」

不敵な微笑

「ああ。俺の能力、性格、実力、器量から見極めるんだろう? 幻想郷にいるべきなのかどうか。」

「当たり前。見極めるのが仕事。」  
少し面白くなさそうな霊夢。

…で

「どうだったんだい？」

相変わらずの不敵な微笑を浮かべて。

「合格よ。戦いを楽しむのはいただけないけど。」

「能力については？」

「心を読むとか、思考が理解できるみたいなきらびかしら？  
そうでもないよ、私の目的が分かるはずは…」

…ふふ

「残念。ハズレ。まだ能力は使ってない。」

じゃあ…

コイツの能力は一体…

少し判断は早かったかもしれない…

## 策略と歩み

微笑を浮かべる柊と

顔をしかめる霊夢。

硬直状態。

「あら、もう終わったの？」

「紫か。」

突然割り込む紫と何故かハモる二人。

「祐介。あなたはこれから人間の里へ向かいなさい。」

「なんでお「宿はとつてあるわ。今は休みなさい。」

そう -

「分かったよ。休めばいいんだろ。」

これからは -

「じゃあスキマ開けるわよ。」

スキマに入るべく、一歩。また一歩と進んでいく。

それを見送る紫の眼は微かに悲しみが読み取れた。

- 休めないかもしれないから。

「どうだった？彼。」  
静かな会話。

「あなたが呼んだ理由も分かる。けど今の彼は危険じゃないかしら？」

「危険かもしれないわ。」

…でも、《あれ》に勝てるなんて彼しか考えられない。」

そう -

何故なら -

彼の能力は -

…

「ここは？」

少し寝たりなさそうな少年。

ゆっくりと身体を起こしていく。

「ちて、ここどこだったけ？」

…

…あれ？

「おかしいな…確か家に帰ってて…」

気絶してて…

「起きたら縛り上げられて…」

喧嘩売られて…

「起きたら知らない布団のなか？」

記憶が…

飛んでる？

・まあいいか。

「よくあるし。」

こういう時は…

「情報収集か」

そついつて懐から、なにか白い紙のようなものを取り出す柊。

《式》

飛び交い始める無数の紙。

「この場所について調べてくれ。」

暫く飛び交ったあと、散らばっていく紙。

…さて。

「誰だい？さつきから僕を視ているのは？」

柘は誰もいない筈の部屋外に向けて話す。

「君に闘う気は無いのは分かる。少し話しをしよう。」

開いた襖から現れたのは、白い髪の少女。

気の強そうな紅い眼と、可愛らしい紅のリボン。

明らかに警戒している。

「…」

黙る少女。

「おはようさん。」

此処がどこだかわかんないから教えてくれると助かるんだけど？」  
笑顔で尋ねる柘。

「…あんた、幻想郷って知ってる？」

…幻想郷？

「知らないのね？」

確認する少女。

「ああ。知らない。ここのことか？」  
尋ねる柘。

「…ハア。また八雲家の紫か…」  
気を落とす少女。



- 紫って誰だ？

歩んだ足跡。

「紫つて誰だ？」

素朴な一つの疑問。

おそらく、抜けているであろう記憶の一部分。

それを聞いて少女の目が見開かれる。

「…え？知らないの？」

正直、初耳である。

「だから誰？なんか偉い人？」

「強い妖怪。あらゆるモノの境界スキマを操る程度の能力。外の世界でいう神隠しの原因。」

「へー…」

記憶にないな。」

「ならあなた、どこから来てあんな事を…」

…ん？

あんな事？

記憶が無い間になにか？

「あなた昨晚…」

語り出す少女。

なにかヤバい気がしてきた…

・上白澤慧音サイド

三日月の綺麗な夜。

目の前には机。乗っているのは白い巻物と黒い筆、明るい蠟燭。

最近の寺子屋では、宿題の提出率が悪い。

「もう一度出してみて、また悪かったら…」

少し楽しみに罰を下している姿を想像していると…

「慧音さん！ちょっと来て下さい！！」

襖越しに聞こえる聞き慣れた里長の聲。

明らかに焦っている。

「どうしたんですか！？」

そういつて席を立ち、襖を開ける。

里長がこんなに慌てるということは・

「異変です！！里の周りを多数の妖怪に囲まれています！！！！」

・異変か

「分かりました。私と妹紅でなんとかします。」

「わ、私達になにか出来るなら…！！」  
皆里を守ろうと必死なのだ。

・しかし

「いえ、大丈夫です。子供らの面倒を。」  
妖怪に勝てるのは妖怪かそれに匹敵するごく少数の者だけだ。

- まずは  
現状の確認と妹紅を呼ぶことか。

「現状は!?!」  
近くにいる見張り役に聞く。

「非常にまずいです。奴ら100や200じゃききませんよ!」

- 急がなければ  
聞くと同時に里から飛び出す。

- まずは里を隠して…

妖怪達の視界から消えていく人里。  
戸惑う妖怪。

そんな中

「アイツだ!上白澤だ!!アイツの能力だ!!!」

どうやら知られていたようだ。

「アイツを殺せエエ!!!」

一斉に向かって来る妖怪の群。

正直、一人では対処仕切れない。

- だけど!!!!!!

「さあ！かかって来なさい！！！」

- 負ける訳にはいかない。

消えていた足跡。

ハアツ…ハアツツ…!!

焦りで息が苦しくなる。

「急がないと…!!」

生い茂る竹林の中を駆け抜ける少女。

里の警笛が鳴ってからどれくらい時間が経ったのだろうか。

目指す先は人の里。

友人が暮らす場所。

「間に合え!!」

息が苦しい。

「慧音!!」

…どこだ？

横たわる多数の妖怪。

横たわる妖怪の先には -

「…なんだ。そんだけ数がいてもそんなものか。」

- 悪魔。

それが第一印象だった。

横たわる多数の死骸を背に、返り血の一つもない立ち姿。

その背には燃え尽きた鳥のようなハネ。

「キミは…」

!!!!!!?????

「少しは

- コワイ。

楽しませてくれるのかい？」

コワイコワイコワイコワイコワイコワイ!!!?

- 悪魔がゆっくりと振り返る。

「キミ…面白いね？」

- その蒼の瞳に見られた瞬間、死を覚悟した。  
不老不死でさえも殺されそうな衝動が走る。

「キミさ、絶対動いちゃダメだよ？」

片目を瞑り、話す少年。

その一瞬殺気が途絶える。

《刹那》

- 一瞬だった。

茂みから現れた妖怪が私に触れる前に

- 死んでいた。

相も変わらず微笑を浮かべる少年。

「やっぱり大した事なかったか。」

彼以外には居ないが、動作が全く見えなかった。

「あ、そうそう。」  
?

「泊まりに来たんだ。宿屋ってどこ？教えてくれると助かるんだけど？」

- なんなんだ彼は…

…そうだ!!

「慧音!!この辺で闘ってた奴知らないか!？」

「ああ、アイツか。アイツなら今休んでるよ。」

どうやら、慧音も無事なようだ。



「じゃあ案内よろしく。」

- 寝る事しか頭にないようだ。

- 案内した後、彼は直ぐに寝てしまったようだ。

私は慧音の様子を見て、無事を確認した後、いつの間にか寝付いてしまった。

「妹紅：ありがとう。」

- 慧音の言葉が届く前に。

静寂。

「こんな感じの事してたじゃない。」

「やっぱりヤバい事してたか…」

「いや…記憶に無いんだけど。」

「そんな気はしてたけど。」

突然の記憶喪失発言になに言ってんだ…みたいな表情を浮かべる少女。

「そうそう。自己紹介がまだだったね。」

「自己紹介？」

「そう。僕の名前は柊祐介。別の世界から来た記憶喪失…かな？  
自分の名を名乗る。…もつとも」

「私のな「藤原妹紅。里から少し離れた所にある、竹林で生活。里に住む上白澤慧音とは友人。老いる事も死ぬ事も無い程度の能力。」

「コッチは知ってるんだけど。」

「…。」

「どうしたの？」

「少しイジワルだったかな？」

「あんだ一体…」  
不信そうな顔の妹紅。

・そろそろ式が帰って来る頃か。

・一瞬だった。自分が疑問を口に出した瞬間。

部屋中の隙間と云う隙間から、彼が放っていた《式》であろうモノが入って来た。

「それ」を確認した瞬間、私は -

気を失っていた。

「それ」は -

静まり返った部屋。

「危ないなあ。入って来るときは注意しろよ。」  
会話。

「コレは…忙しくなるかもな。」

読み終えた手紙。

・とりあえず…

襖の音を最後に静寂に包まれた。

遠い昔の出来事。

世界が生まれた時。

同時に生まれる天界と魔界。

天は人と生き、魔は本能のまま生きていた。

別れた天と人。

墜ちた天人。

墜ちて

墜ちて墜ちて…

たどり着く先は…

…から「

「だから何だと言っただ！今天界にそんなモノは必要無い！！」

彼は重大な反逆を起こした大罪人。  
現在、捕らえられて裁判の真つ最中だ。

「《アレ》があつてこそその天界だぞ！！簡単に決められてたまるか  
！」

彼は天界の頂点。人に神と呼ばれる存在なのだが -

- つまらない。

- 天界なんて…

- 消してやる！！

そう。

コレは…

遠い昔の物語。

## 黒い夢

- 何処だろう。

- 何だろう。なんだか…

- 懐かしいような…

- そうか。コレは…

- 夢…か。

- とある満月の夜。

「妖怪は出ていけ…！」

- 違う…

「早く出ていけ！お前が居ると里が危険なんだよ…！」

- 違う… わたしは…

家に隠れた子供達が泣き叫ぶ声が聞こえる。かつて授業を受け持っていた子供達も中にはいるだろう。

「早く出ていけ…」

「里長…」

聞いた事もない里長の棘のある言葉。その里長の言葉を聞いた瞬間、自分の中で何かが込み上げて来た。それは悲しみだろうか。それとも怒り？

「…分かりました」

「やった！流石里長！！コレでアイツは帰って来ませんよ！！」

後ろで聞こえる若い男の聲。その聲はトドメを指すように慧音の心を刺激した。

「私…わた…し…は…」

満月の夜。誰も居ない森の中で慧音の視界は込み上げて来たモノにより見えなくなっていた。

ヴヴヴ…

突然鳴りだした重低音。

そんなものはどうでも良かった…

夢の終わり…そして。

「ガバツ!!!」

嫌な夢だった。最近所か百年は見ていなかったのに…。

起き上がった慧音の首筋には一筋の冷たい汗。

「何か嫌な予感がする…。」

それは昨日の妖怪来襲異変よりも何か大きな…。  
里より大きな…

山…

竹林…

そして

「…幻想郷？」

いや、ない。今まで異変は多数有れど、幻想郷全てを巻き込む程のモノは無かった筈。

「大丈夫。」

それは強がりではなく、幻想郷に住む者たちへの信頼。

「ドスッ。」



大丈夫。きつとみ…

「…少し眠ってな」

この声…何処かで…

まさか！？早く伝えないと…

…でも

もう眠い。

…広がる闇の中で静かに目を閉じた。

矛盾。すれ違い。

- 人間の里、柊の部屋。正午。

…こ…う

体が揺すられている…？

…う

この声…何か忘れているような…

「妹紅！！」

-！！？

声をかけて妹紅を起こした慧音。

妹紅はよほどびっくりしたのか、急いで飛び起き、慧音から距離をとる。

「わっ！？…どうしたの妹紅。そんなに慌てて。」「  
当然驚くのは慧音も同じである。」

「慧音…お前は一体何者だ！？」

慧音をきつ、と睨み殺気さえ放つ妹紅。

「なに言ってるの妹紅。あんまり変な事言つと永琳のとこ連れて行きますよ？」

何故柊という少年の部屋で妹紅が寝て？いたのかは知らないが、自

分が何かした覚えはない。

「…」

「そんな事よりここにいた格って子知らない？聴きたい事が山ほど

バシユユツツツ！！！！！！

「え？

「熱い…

慧音を貫いた炎弾は畳にぶつかり、まるで地獄絵図のごとく二人を照らしていた。

「も…こう…？」

撃たれた腹部から流れ出る血を押さえながら弾を放った本人を見据える。

・その時の妹紅の眼は

「オイ！宿から火が上がってるぞ！！！！？」

・いつもの暖かい紅とは違い…

・憎しみに満ちた蒼だった。

「妹紅…あなた…」

そこで慧音の意識は途絶えた。

## 此処は幻想郷。

- 迷いの竹林。 正午。

「ギヤアアアア「ウルサイ。」

先ほどから一人の少年と背負われている少女に対して敵意を露わにし、襲いかかる妖怪。

しかし、少年達に近づく度に斬撃を浴びている。

ある者は一瞬で意識が途絶え、急所をかわした者は先ほどのように丁寧にトドメをくらう。

「まだ着かんのか」

そう呟く柊には全く疲れといったものは感じられない。

それにしても背負われているこの少女、藤原妹紅…

- 爆睡である。

- あ

「やっと見えたか。」

柊が目指していたのはここ、永遠亭。何がしたいかという自分の式を視たこの少女の治療なのだが -

「すみませーん。ちょっと見て欲しいんですけど。」  
そう眼前の和風な屋敷に声をあげると…

「はい！今出ます！！」  
元気な返事と共にゆっくりと開くドア。

・何だかこの光景…昔話に出てくる日本みたいだな。式の調べでも、日本とあんまり動植物辺りも変わってないみたいだし…

その考えは一瞬で碎かれる。目の前の扉から現れた一人(?)によつて。

「…」

「どうしたんですか？」

自分を呼んでおいて全く話さない柊を見て首を傾げる。

同時に揺れ動く兔(?)の耳。

「やっぱり此処は幻想郷か…」

柊の憂鬱はまだ終わらない。



ピチューン!!

「お？」

なんか一つ音が多かった？

他に誰か巻き込まれたのか？

なんて考えていると…

「すみませんね。家の姫様にご迷惑をかけまして…」

未だに晴れない砂煙の中から聞こえてきた女性の謝罪の言葉。どうやら弾幕を放ったのは彼女ではなく、《姫様》らしい。

「いえいえ、僕が何かご無礼をしてしまったのなら謝ります。」

徐々に引いていく砂煙。

「それはそうとして…」

膝元に付いた砂を両手でおとす女性。

かなり長い髪を一つの三つ編みでまとめているのが印象的だ。

「アナタは何故弾幕を予知できたのですか？」

「予知…ですか？」

さも知らないように首を傾げて見せる格。

「ええ…アナタの能力。そうでしょ？」笑って確認をとる女性。二人の間には常人には解らないような読み合いが存在していた。



「…当たってるけどハズレですね。」

「そう…残念ね。じゃ「そんな事より」  
?」

「早いとこ彼女を診て欲しいんですがね?」  
彼女とは柊が担いでいる妹紅の事である。

「…別に嘘なんかつかなくてもいいですわ。アナタの目的は別に  
あるのでしょ?」

…凄いな

「アナタの本当の目的は幻想郷の存続のために私達の永遠を狩るこ  
と。違う?」

「…本当に凄いな貴女は。」

頷きながら手を叩きあたかも感心している素振りをする柊。

…でも

「一つ間違い。僕的能力はただ、《見る》こと。」

…私の言葉を否定しない。やっぱりこの少年は…  
戦うかもしれない今、気になる事は…

「ただ《見る》?」彼の能力。

二人いや、三人の屍(?)と静かに戦う二人。

確かにそこには混沌が存在していた。

互いの思惑。(後書き)

ムーンダスト。

白から紫までの鮮やかな色彩をもつ花。

花言葉は「永遠の幸福」

永遠は終わりが見えるからこそ永遠であり、終わらない世界は永遠とは程遠い。

一人でさえ決まらない幸せの形。

そんな世界で皆の幸せの形は定める事は出来るのか。

- そんな話。

遠い昔の出来事。 零・杏

冷たい部屋。突然目が覚めたように意識がはっきりする。

「ここは…僕の部屋…？」

不思議だ。自分の部屋のはずなのに初めて見たような感覚…。

今腰かけているベットや部屋に置いてある棚の場所すらおぼろげにしか思い出せない。

「あなた…」

「…誰？」

不思議だ。突然話しかけられたにも関わらず、とても自然に反応できってしまう…。

自分でも驚いてしまうほど冷静で、ゆっくりとした動作でふりかえる。

美しい。

時が止まったかと思った。

何が？

女性の顔？

容姿？

いや、「全て」が答えになるのだろう。金の長髪も、ゆったりとした雰囲気も。

「あなた、面白いのね。」

「何を言ってる…」

意味が分からない。

俺のどこが…

「まさかあなた…あんなことをしておいて…」

不敵な表情をやめ、少し驚いた表情をうかべる女性。そういった一つ一つの挙動にさえ集中してしまう。

…そんなことよりまさか僕…この人になんかしたのか！！！！！？？？

「大丈夫。貴方は私には何もしてないわ。」

良かった…人として間違った事は…

「ただ少し暴れて、天人を殺しただけよ。」

…え？

「僕が…天人を？そんなはず」「自分で確かめなさい。ほら、お客様よ。」

彼女が言い終わった時、彼女とは逆の方向にあるドアが勢い良く開かれる。

そこから現れたのは…

「…母さん？」

母さんだった。何やらとても急いでいるようだ。

「祐介！早くどこかへ逃ご。」

…え？

今日は驚く事が沢山ある日だ。

突然目の前に知らない美女が現れたり。

その人に「殺人した事忘れてる？」とか言われたり。

目の前で母さんの首が飛んだり。

ああ。さんざんな一日になりそうだ。

遠い昔の出来事。 零・杏（後書き）

紫紺野牡丹

夏から11月頃まで「長い間」咲き続ける「紫」の花。

花言葉は「平静」

次々と起こる変化に対する強さの表れ。彼の平静は何時まで続くのか。

それは彼にも分からない。

更新終了（、、）b

昔話については説明無しで行きたいと思います。

そんな事より、東北地方の方は大丈夫ですかね？

大きな地震と津波があったそうなんです。

今回に限らず、皆さん注意して下さいね？こんな駄作見てくれる心優しい人には怪我してほしくありませんから。

（、、）>キリッ

始まる狂怖。 恐気。

「見る事？」

「ええ。 恥ずかしい話ですが、ただ見る事しか出来ないのです…今は。」

挑発的ながら丁寧話す少年。 妙に引つ掛かる話し方をしている。

「今は…とは？」

考えにくい話だが、二つ能力を持っているのか？

「僕はもう一つ能力を持っているらしいのです。」  
質問を誘うように話す柊。

(明らかに質問を誘っている。 しかし、乗った所でこちらに害はないはず。)

「聞いても良いのかしら？」

・ 平静を崩した方が読み負ける。

・ さあ？

凍りつく空気。

そんなものこっちが聴きたいとばかりに首を傾げてみせる柊に、戸惑いを隠せない。



「面白い…!!」

「こちらからも仕掛けてみるか…」

「貴方はふ…」「そこまでよ。」

…誰だ？

「八雲紫か」

さつきまで話していた女性（先ほど《見た》ところ八意永琳と言っらしい。）が新たに現れた女性（八雲紫と言っらしい。）に話しかけている。

…しかし突然現れた女性：彼女は何者だ？名前ぐらいしか《見る》事が出来ない。

それに彼女たちは、何やら長く話しているようだが少し間があるため聞き取る事は出来ない。

…どういうこと何だ？此処では一体何がおきているんだ？

…どうやら話し合いは終わったようだ。

八意永琳は周りの屍（？）を回収して、屋敷の中へ運ぶようにウサギ達に命令している。何やら急ぎの用事らしい。やたら動きが早い。

「それで…柊。」  
知らない人に突然名を呼ばれる違和感。  
それに柊は慣れてしまっている。

「僕に何か？それとも《俺》の方ですか？」  
- 自分が二重人格だと云うことを知っているから。

「どちらでもOKよ。…戦えればね。」

…またか

「戦いなら《俺》の方がやってくれる。」  
- そう

「あら、まるで他人事のように言うのね。」  
妖しい微笑を浮かべている八雲紫。

- 突然、怒りに似た感情が湧き上がり

抑えられなくなり

僕は意識を手放した。  
その時見たのは口角をあげ笑う妖だった。

始まる狂怖。 恐気。 (後書き)

遅れてすみません

m ( | | ) m

地震…だと!?

もの凄い事になってますね。 私も他人事では無いことがあったりな  
かったり…

仕方ない事とは言え、人が死んでしまうのはやっぱりきつい所があ  
りますね…

そのあたりは若干この小説のコンセプトにも関係するかも。

死。 残される人。 永遠。

そんな感じで。

## 謎の異変。

「…おはよう。かしら祐介？」

目の前に居るのは、俺が知る限り最低な女だ。

「何だよ。何で俺を呼んだ？」

コイツは本当に何がしたいのか分からない。

「あら、最初に言ったハズよ？異変解決の手伝いをしてもらう…って。」

本当にコイツの微笑は…

「それは分かってる。でもこの前の異変ならちゃんと親玉は《見つけ》て殺したハズだが？」

・そうだ。ちゃんと一体一体の情報から見たから間違いない。

「それがまだなのよね…。」

「何で…まさか…!？」

「そのまさかよ。貴方は異変を解決出来ていない。貴方に《見えないう》という事は私のように《隠せる》という事。しかも…。」

・貴方よりは強い。

「俺より強い…か…。」

自分より強い相手。

明らかに自分より強いのは分かっている。  
でも -

「楽しそうね？祐介？」

感じるのは -

「ああ。どんな奴か見てみたい。それに -  
薄く笑いながら愉しげに話す柊。

「勝てばまた一步あんたに近づける。  
ただ楽しさと嬉しさだけだった。」

「じゃあ行ってくれるのね？」

戦えるのは嬉しい…が。

「何故あんたが自分で動かない？あんた程の力…神に匹敵するほどの力があれば一瞬だろう？」  
「何故俺を呼んでまで自分が動かないのか…」

「私には大きな仕事があるの。」  
当然のように話す紫。

「…冬眠？」

「ええ…。」

「…これで終わりね。」

目の前に開いたスキマを閉じる。

里の為に医者も飛ばしたし、柊も飛ばした。

「あとは…神社で観戦会でもしましょうか。」

霊夢と魔理沙も一緒に…

- 早めに行かないと彼女たちが動いてしまうわね。

ゆつくりと神社までのスキマを開く。

今回ばかりは誰にも動いて貰っては困る。

「さあ。行きましようか。その前に…藍！」

新しく右手で開いたスキマから出てくる美しい女性。

その美しさは紫にも劣らない。九本の尻尾も美しさを底上げしている。

「はい。何のご用ですか？紫様。」

- 九尾の狐。

「一つお使い…いいかしら？」

- 妖怪の賢者。

暫しの話し合い。

- 生まれる静寂。

永遠亭の前。

誰もいない。動く者は。

同日。同時刻。博麗神社。

「今日も平和ね。」

ズズツ…と縁側でお茶を飲んでいる霊夢。

「こんな日には何時も…」

「おーい！霊夢〜！！」自分を呼ぶ一応友人の声。

「異変が来るのよね。」

「縁側に居るわよ！勝手に上がって！！」

「ここは暫く動きたくない。私の勘は当たるから異変に間違いないハズ。」

「あいよ〜。」

言われる前から上がっていたような素早さで横に座る、白と黒を基調としたいかにも魔女ですよ。みたいな格好の少女。

「で？今日はどうしたの魔理沙？」

「どうせ異変だろうが聞いてみる。」

「そうそう！なんか昨日の夜から里の方がうるさかっただろ？異変かと思つてさあ…。」

「あら…。あんたが眠れなかった…って話？珍しいわね。私の勘が外れるなんて。」

予想外の台詞に驚く魔理沙。

「私が寝不足になるほどの異変だぜ？」

「あら。楽しそうな異変じゃない。」

よく見ると若干疲れている魔理沙の表情。

… 本当に魔理沙から睡眠を奪うなんて。

「… まあいいわ。行きましょ。」

- 異変の解決に。



謎の異変。(後書き)

・リアトリス

もじゃもじゃとした白やピンクの花をさかせる。

花言葉は《向上心》。

ただ上を目指す柊。

彼の求める強さとは紫に勝つ事？

もし勝ったとして先にある物は彼に見えているのだろうか？

何かを知る紫。

彼女の計画とは？

決心。

「-待ちなさい。」

「うえっ!!!???」

異変解決に向かう予定だった私達に突然話かける声と、驚いて変な声を上げて驚く魔理沙。

私は慣れてるから全く驚かない。

「なにか用?紫。」

「なにか用?だなんてそんな言い方しなくても良いんじゃない?」  
紫は少し上の空間から半身を乗り出し、妖艶に笑っている。

「で?今日はどんな話かしら?私達異変を解決しに行くんだけど。」

「そうだぜ。私の睡眠を奪った相手を捕まえに行くんだぜ。」

早く解決してぐっすり寝たいのであるう魔理沙。

今にも寝てしまいそうな表情からは深刻な問題だと言うことがひしひし伝わってくる。…しかし

「その話なんだけど、あなた達はここで見物していてくれるかしら?」

紫は異変の解決どころか動くな。という…。

まるで何かを守るように。

「…見物?今回は紫が解決しに行くのか?」

魔理沙の疑問。

あの紫が事件の解決に行くなんて…

「そんなわけ無いじゃない。」  
「ですよー」

「じゃあなんだ」柊ね。彼の力に頼るのね？そうでしょう？」  
…そうじゃ無かったら紫が異変をほっておく訳がない。

「そうよ。柊。彼の本当の力が見てみたいのよ。」  
…やはり

「ちよつと待てよ！全然わかんないぜ？柊って誰だ？」

ただ一人話について来れない魔理沙。

「…分かったわ。あなたと彼を見守るわ。ただし…」

もし彼が間違えた時は…

「分かっているわ。彼も。ね」  
2人の間では会話が出来る。しかし魔理沙は…

「柊??何だそれ?美味しいのか?」1ミリも解っていないようだ。  
「じゃあスキマを開きましょう。」  
解っていない魔理沙を置き去りにして話を進める紫と霊夢。

…全く。私は柊が誰かも分かんないってのに。

考えている間に紫が腕を動かし、様子を見るためにスキマを開いていた。

中を覗くと、燃え上がり、跡形もない里の前に一人立つ少年。少年上だろうか。朱い髪と蒼い眼が印象的だ。

「コイツが柁？強いのか？」

「…。」

「どうしたんだ？霊夢？」

急に黙る霊夢に驚く。

「私は負けたのよ。あいつに…。」

「…!!!????」

「ちょ…それ、本当なのか？」

初めて知った…

もしそれが本当なら…

静かに立ち上がり霊夢に聞く魔理沙。

「ええ。しかも一回も攻撃されないで。」

淡々と語る様だが、霊夢の声はどこか震えていた。当然、彼女には彼女のプライドがあったのだ。

そして魔理沙にも…

「私がこの異変を解決する。」

- 静かだが強い決心。  
魔理沙の心に響いた重低音。  
それを知る者はいない。

決心。(後書き)

オーニソガラム

白い花を咲かせるユリ科の植物。

5月3日の誕生花で、花言葉は《才能》。

10代という若さで最強を誇っていた霊夢。まさに才能の塊。しかし、柊の登場により、無敗の記録にキズがついた。

それは魔理沙にとってもまた…

枯れてしまったオーニソガラムの花。

一度枯れた花は何を思うのか。

**霧雨魔理沙。**

あいつは…

あいつは何時もお茶を飲んでた。

あいつは何時も掃除をしていた。

私は…

私は何時も魔法の実験をしていた。

私は何時も沢山の魔法書を読んでいた。

あいつは何時も異変を解決していた。

私も出来るだけ異変の解決を手伝っていた。

あいつは最強と謳われた。

私は…

あいつは幻想郷を守る結界を管理している。

私は…

私はツツ…!!

私はあいつになりたかった。

私はあいつに勝ちたかった。

きっとあいつは私をうるさい友人と思っている筈だ。

だけど好敵手とは考えていないだろう。

私の憧れだという事も勝手に競争相手にしているという事もあいつは知らない。

でもあいつは負けた。

外の世界の住人に幻想郷の最強が負けた。

つまり外の世界にはもっと強い奴がいるだろう。

そんな奴らが現れた時、私は大切な人たちを護れるだろうか？

否。

でも、護らなくてはいけない。

そう思える人達がいるから。私だって…私だって頑張った。

色々魔法を作ってみたり、名前も知らないような魔法書を読んだり。

あいつがお茶してる間に私は実験を繰り返し、あいつが掃除している間に私は魔法を覚えた。

それでも、あいつにはなれなかった。あいつに勝てなかった。



私の努力は、

あいつの才能に

遠く及ばなかった。

それでも諦めたくなかった。

私にも、

守りたい物が確かにあったから。

そもそもあいつに逢わなければ良かったのだろうか？

そうだ…

あいつさえいなければ…

**霧雨魔理沙。(後書き)**

グラジオラス

花言葉は「たゆまぬ努力」。

語源は「剣」。

努力の塊「霧雨魔理沙」。

その努力で培った力は心次第では盾になり、剣にもなる。

魔理沙が目指した力は盾？それとも剣？

## 謎の異変。弐。

「あらら…」

突然神社を飛び出し里の方へ飛んで行ってしまった魔理沙。それに対し、少し驚きを隠せない様子の紫と霊夢。

(…今回ばかりは少し黙っていて欲しかったんだけど。まあ、彼ならなんとかするでしょ。)

- 問題は彼よりも…

「霊夢？」

- 彼女。

「…大丈夫よ。少し…っ！」

霊夢の肩が揺れている。

魔理沙に確認をとられたことで悔しさが蘇っているのだ。長い間堪えてきた様々な感情が頬を伝って流れ出す。

「大丈夫よ。大丈夫だから…」

揺れる肩を後ろからそっと抱きしめる。

…大丈夫。

静かな縁側の二人をいつの間にか朱い夕日が照らし出していた。

「…もう大丈夫。」

どうやら落ち着いたようだ。

二人を照らしていた夕日は沈み、空には静かに満月が上っていた。

・満月：今日のは一段と綺麗な満月ね。こんな日には…

「霊夢。そろそろ始まるわ。」

紫が呼んでいる。

そういえば昼頃から既に戦闘は始まっていたはず。

始まっていたはずなのに自分の事しか考えられなかった自分が恥ずかしい。

「戦況は？」

何気なく聞いてみる。

「約800対1。もう終わったわ。」

「！？」

「…え」

「柊の勝ちよ。妖怪は壊滅状態。でも」

「まだ一番大切な事が終わって無い。」

「彼、本当に凄いわね。800もの妖怪を相手にして勝つだなんて。」

疑問点が多すぎる。

「…スペルカードは？」

「彼はそんなの持ってないわ。」

「じゃあ相手の妖怪達は…」

「そ。みんな柎にやられたわ。」

淡々と答える紫。

満月を背に少し笑みを浮かべているその様はまるで異変を楽しんでいるようだった。

「じゃあ私も行かなくちゃいけないわね。妖怪だからってほっておけない。」

この幻想郷において妖怪は半分以上を占めている。それでも今までバランスは取れていた。今更崩す訳にはいかない。

「だーめ。あなたは。」

・ どういう意味…っ!?

突然の浮遊感。

だんだん紫が視界から離れていく。

・ 否。

私が紫から離れて行っているのだ。

「悪いわね。」

・ 紫の声。

「あなたをあそこへ行かせる訳にはいかないの。」

閉じていくスキマ。

とりあえず、自身の《空を飛ぶ程度の能力》で浮遊感にブレーキをかける。

- しかし、いつみても気持ち悪いわね。

彼女が今いるのは、紫の能力によるスキマという世界。

あらゆる境界から隔離された、紫色に目玉という気持ちの悪い世界。

- 行かせる訳にはいかない。という事は、異変が終わるまでは出さないつもりなのかしら…。

異変には直ぐに解決するものと、時間のかかるものがある。  
もし後者ならヤバイ。

- お腹空いた…

霊夢の空腹との勝負が始まる。

- 早く解決しなさいよ…柊…。

謎の異変。弐。（後書き）

- 紫カタバミ。

花言葉は母親の愛。

全てを受け入れる幻想郷。

それを代弁するかのように全てを受け入れる紫。

霊夢を抱く紫には確かに母親の愛のような感情があった。

しかし、全てを受け入れる事は必ずしも優しい事では無い。

こぼれ出す者も居るのだから。

## 謎の異変。参。

夕日が綺麗に差し始める頃。

里では妖怪の襲来に備え、門の補強や警備の強化がされている。

「紫の言い方だと、今正に襲われているのかと思ったんだが…」  
柘は少し開いた場所で座りこんで、作業を見、妖怪が来るのを待っていた。

・正直驚いた。あの女を《見る》ことは出来ないとはいえ、あの時彼女が嘘をつく必要はあったのか？

・否。無かった筈。

たしか今日は妖怪とは関係の無い火事が一件あっただけ。らしい。  
妖怪とは…ね。

問題はその火事。

慧音という奴が怪我したらしい。全く何やってんだか…

「まだ来そうにないし見に行くか。」  
立ち上がり、尻についた土を払う。

・確か前回《見た》時はチラ見レベルだからあんまり深く見れなかったが、

確か人間ではなく半獣。

…そんなに強く無かった気がする。

そんな事を考えている内にどうやら彼女がいる場所に着いたようだ。

他の人の記憶は便利この上ない。



その人の弱点やトラウマなど簡単に知ることが出来る。

- 閉話休題。

とりあえずドアをノックすると、返事が返って来たので中に入る。

この建物自体はそこらにある日本の昔の家屋と大差はなかった。しかし中は予想以上に広かった。学校だろうか。

「はい。どちら様ですか？」

出てきたのは当の上白澤慧音。

「あ！？あの時の人！！何か私にご用ですか？」

記憶によると、どうやら八意永琳に治療を受けたようだ。

「いや、様子を《見に》来ただけだ。これといった用はない」  
しかしコイツ、随分心が綺麗だな。

「少し話しません？お茶菓子ぐらいなら直ぐにせますから。」

- やはり何かおかしい。綺麗すぎる。穢れが無いなんて有り得ない。

コイツ…もしかして記憶が一部消えている…！？

これは何か裏がありそうだ。

「どござ。」

少しの菓子とお茶をついで近くにあった机の上に置いてくれる。

- これは《俺》の領分じゃねえな。少し寝るかな…

・戦いになったら起きるからよ。

・じゃあ…バトンタッチだ。

## 謎の異変。四。

「あなたはどこから来たの？」

「ここじゃない世界。」

即答。

「目的は？」

「とりあえず紫に勝つこと。」

即答。

「何故里に？」

「紫に異変以外での殺傷行為は禁じられてるから。」

即答。

「どづいつ事？」

「そのまんま。異変が起きるから。」

即答。

「…あなたの能力は？」

「やだ。」

即答。

「てか、話し合い？」

二人だけの広い部屋の中、《話し合い》という名の質問責め。

自分でもコレはおかしいと思う。

それでも訊かずには居られなかった。

・どつして？

私はこの前のお礼を言おうと思ったただけなのに。

まあ…

そうなってしまったのはしょうがない。

今からでもお礼を -

「ねえ」

しばらくの間思考していたため、ポケットとしていたようだ。

「聞いてんの？なんで半獣あんたが里にいるのか…って聴いてんだけど。」  
「…え？私が…里にいる理由？」

案の定、こいつの心の中には疑問だらけだな。

「言い方が悪かったか。なんで半獣あんたが里に居られる？」  
いくら昔から居るとは言え、妖怪側の血も混じっているんだ。  
完全に交わる事など有り得ない。

何故なら僕も - いや、それはいい。

「…。」

困った顔をして悩む慧音。

「分かんないだろ？」  
「やっぱりか。」

こいつは…

自身の嫌な記憶を全て忘れている。

## 謎の異変。四。（後書き）

昨日の夕刻。

幻想の里に妖怪が大量に押し寄せた。

後に語られるであろうという程の異変だ。

どうやら半獣である上白澤慧音（別項目参照）と柊祐介（詳細不明）という八雲紫（別項目参照）の差し金により鎮圧された。

しかし、これは始まりでしか無かったようだ。

柊祐介によると、今日もまた、妖怪が大量に押し寄せてくるようだ。

里の者は警備の強化に当たっている。

私は生き延びてこの異変を見届けなければ…

## 第九代目

## 謎の異変。伍。

嫌な記憶を忘れている。

それは、つまりそれに関わる事も忘れていていると言っていること。

「じゃあ今朝の火事の事は？」

分からないと言う様に首を振る慧音。

「自分が怪我をして、今まで寝ていた理由は？」

「…分からない」

「あんたが僕に質問した問いの意味は？」

「…分からない」  
いいぞ。

- 分からない！分からない！分からない！分からない！分からない！  
分からない！分からない！分からない！分からない！分からない！  
分からない！分からない！分からない！

突然操り人形の糸が切れた様に倒れてしまった慧音。

おいおい。思ったよりこの異変はヤバいかもしれない。

慧音だって幻想郷で考えると決して弱い部類ではない。  
それでもこの記憶の矛盾に耐えられ無かった。

「ちくせう…直ぐ記憶が戻ると思ったのに。まだまだこの物語は序盤だろ？」

- 最初からこれだとやる気が…  
ため息をついて立ち上がる。

「どうしようかな。このまま放置しようかな？それとも永琳に睡眠薬でも盛らせて黙らせるかな？」

何やら後半部分に悪意を感じるのは気のせいだろうか。

倒れている慧音を前に立ち尽くし暫しの思考…のち、

「よし！放置しようか！！」

「あら？生死すらも確かめないなんて、私の医者としての立場からするとかかなりいただけないわよ？柊。」

- ギクツ。

どこかでつい最近聴いた声。

「…八意永琳。」

背後から殺気を感じる。

多分、今下手に動いたら殺られる。

「どうしたんだい？八意永琳。やたら心配そうじゃないか。」

「当たり前よ。これ以上…妹紅に怨みをもたれたくない…ってか？」

あ…しまった。コイツの前では能力を隠してきたかったのに。



「…知っているの？私と姫様、それに妹紅の過去。」

「何故か殺気が急激に増えたように感じる。」

「はぁ…ミスった」

少し疲れそうだ…

## 謎の異変。伍。（後書き）

…新しい情報が入ってきた。

どうやら上白澤慧音と柊祐介の会話が終了。

同時に八意永琳の乱入を確認。

八意永琳の目的は不明。治療か…他の何かか…

…ところで私事であり、記録者としては書いても良いのか解らないが、何か、《妖怪の襲撃》よりも奥に何か感じてならない。

柊祐介に関する事だろうか…

どちらにせよ私ができるのは、部下に調べさせて記録することだけだ。

残り半分の命。

見事に使い果たして見せる。

## 謎の異変。祿。

ハア…

「か…ぐや…っ!」

ハアッ…ハア…

「も…妹紅!」

重なる吐息。

触れ合う二人。顔は赤らめられている。互いによって…  
それは正に…

「どっからどうみてもR-18じゃないか」

その声を聴いて赤面し、素早く飛び起きる一人?の月兎。

「ウソうさ」

・殺し合う二人を尻目に鈴仙の赤面を眺める…最高だ。

「ちよつとてゐ!私をからかわないでよ!」

・鈴仙、必死うさ(^w^)

「あはははははは!」

「待てー!」

逃げ出す因幡の素兎と追いかける月兎。  
背後には首を締め合う不死の二人。

「ちよつといいですか?」

突然聞こえて来た声に全員が振り返る。

鈴仙だけはびっくりしたせいかわか地面にヘッドスライディングをかましているが。

「あら、八雲藍じゃない。紫から何か伝言でも？」  
永遠亭の姫こと輝夜の言葉。

「はい。紫様の命で、白玉楼と永遠亭にお伝えする事が。」  
あくまで淡々と。

「今取り組み中なんだ。用があるなら早くしてくれ。」

「あなたに最も関係のある事です。妹紅さん。」

「一体なん「人間の里が襲撃されています。」  
!!!!!!!!!!!!????????

「ちよつとまで!? 異変は昨日解決したんじゃない!?」そうだ。柊のあの恐怖を覚える程の強さで妖怪は全員殺られたはず…

「何にせよ、現在里が襲撃されていることに変わりはありません。」  
…

「妹紅…何やってんの? 早く里に向かいなさいよ。邪魔なんてしないわ。」

何時もなら里の子供一人でも飛んでいくのに。

「…なんだよ。」

俯く妹紅

「え?」

「何で私なんだよ!!」

何…これ？

妹紅のプレッシャーが…今までとは比べ物にならない!？

「何時も、何時も、何時も！何時も！里の奴らは助けても怪物呼バケモノばわり…疲れたんだよ…」

感情が抑えられていない。狂気にとらわれている。

この状況は非常にマズい。

私も妹紅も死ぬ事は絶対、無い。

だが優曇華やてゐ、藍は…

「だから、早くシネよ」私が止めないと。

## 謎の異変。祿（後書き）

どうやら報告によると里、永遠亭、博霊神社付近で大きな戦闘を確認したらしい。

その詳細を記そう。

里では慧音が発狂。手の着けられない状態。加えて八意永琳の物と思われる弾幕を確認。

永遠亭では藤原妹紅と蓬莱山輝夜、八雲藍、因幡てゐが対立。

博霊神社付近では霧雨魔理沙と博麗霊夢の対立。

…ところで、阿礼の子とは便利なものだ。

「おっと。変な事まで書いてしまった。ちゃんと消しとかないと。《紫様》に殺されちゃうよ。」

## 謎の異変。七。

月が優しく闇を照らす夜。

霧雨魔理沙は博霊神社から里へ向けて飛行を続けていた。

…

「あれ、おつかしくないか？もう里に着いても良い頃なんだぜ？」

「一時は最速とまで言われたけど…」

「この筈もそろそろ限界かなあ。」

「あれ？」

それは何気なしに横を向いた瞬間。

長い階段の先にある見慣れた建物の姿。

「どういう…事なんだぜ？」

「は…博霊神社！？」

「何かおかしいと思ったら私が狂ってただけだったぜ。」

「ふう。危ない危ない。私が方向音痴かと思っただぜ。」

とりあえず、筈を止め、落ち着いて状況を整理する。

「私は神社から真っ直ぐ里に向かっていた…つもりだった。これは間違いない。」

「気がついたら、神社に帰って来ていた。あれ？おかしいぜ？狂ったのはいつだ？」

狂うのには慣れてるから分かる。

狂う前には必ずスイッチのような出来事がある。今回はそれが分からない。

「うーん…」

・私が狂っていたのは今より前だから…神社を出た辺りか？スイッチは…

「なあに？魔理沙。また楽しい魔法でも考えてるの？」  
後ろからの突然の呼びかけに危うく箒から転落しそうになる。

・つぶな！？

急いで姿勢を持ち直し、ズレた帽子をなおす。

「驚いた？」

聞き慣れた声に振り返る。

「霊夢！紫は止めなかったのか？」

「…」

答えはない。だが、自分自身の考え事であり気には止めなかった。

「紫？そうか私は狂ったんじゃない？」「ねえ？早く行かないの？もし紫の仕業でも、気をつければ何ともないと思うけど」

「たしかになっ…て、え？」

改めて見る霊夢の姿。

・なんかいつもと違う気がするぜ…



まあいいか。霊夢がおかしいのは大体いつものことだし。

「じゃあ

「行こうぜ。」

踵を返して前を見る。

「そういえば、何で神社を飛び出したんだっけ？」

「なんか私にとって重大な事だった気が…」

軽く首を傾げてみるが全く思いださ

突然、腹の辺りが熱くなる。

「そんなんだから魔理沙…あなたは私に勝てないのよ。」

驚いて押さえた手に伝わる生温かい感触。

「霊夢…お前…」

必死で振り返った瞬間に気付くさっきの違和感。

「いや、お前…誰だ!?!」

その判断の材料はどこまでも冷たい蒼の瞳。

「私？霊夢よ。知らない訳無いでしょ？」

「まああなたの知る博麗霊夢では無いかも知れないけれど。」

背後から正面に向かってゆっくりと回る。

「…なんだよ、コイツ。」

もしかして、里に着けなかったのは…

「あなたは運が悪い。今日一日風邪でもひいて家で黙ってれば死ななくて済んだのに。」

哀れむような瞳。

・本当。何で今回出てきたんだろ。馬鹿みたいだぜ…

「もう言葉も話せないの？じゃあ、楽しめないわね…お休み、魔理沙。」

霞んだ視界の中であいつが腕を上げるのが見える。

クソ…最近の寝不足がたたったぜ。

だんだん眠く…

広がる闇の中で鮮やかな弾幕が光を放った。

謎の異変。七。（後書き）

記憶。

辛い記憶。

楽しい記憶。

様々な思い出。

人には楽しい時間と同じだけ辛い時間が来るといふ。

それでも、楽しい時間は短く。

辛い時間は長く感じるのは何故だろう。

辛い記憶の方が思い出されるのは何故だろう。

私はどうすれば良いのだろうか？

限り有る幸せの中で笑っていられるのだろうか。

幸せの後には絶望が来ると知ってなお笑っていられるだろうか。

私は答えが欲しい。

私は答えが欲しい。

## 里の決闘。

「あなたが普通に私達の過去を知っているとは思えない。偵察役の  
兎からの報告によると、あなたが現れたのは昨日の夜中。」

・しかも

「妖怪を追い払った後、感謝祭さえ断りすぐに宿で寝付いている。」

・つまり

「あなたには唯一知る妹紅と打ち解ける暇はなかった。つまりあなたの能力は《記憶を見る程度の能力》。違う?」

よくもまあ矢を向けた状態で真偽が聞けるな…

大体の奴はプレッシャーで違うなんて言えねえよ。

「残念ながら65点だ。」

もつとも俺が出したヒントとか…ボロとかだけだと100点だけど。

…来る!!!!

軽く首を左へ傾ける。

刹那、首があつた場所を矢が素早く通過し壁に深く突き刺さる。

「おいおい、外したからって怒るなよ。」

反転して向かい合い、軽くステップして距離を空ける。

「どちらにせよ、あなたと戦えば分かるかと思ひまして。」

笑顔でこちらに矢を向けて来る。

・流石《月の頭脳》。  
全く隙がない。

てかどうしよう。

戦いたくないけど、あちらさん殺る気満々だしなあ。

ゆっくりと呼吸をして腰元から刀を引き抜く。

「あなた…どこからそんな危ない物出したの？」  
少し驚いた顔をする。

「さあ？けど、一つだけ知ってる。この能力は例え神の武器でも作り出せる。」

そう、もう一つの能力。

それは・

「《あらゆる武器を創る程度の能力》」

・この刀は絶対に傷つかないだけのただの日本刀だけ。

「あなた、思ったとおりずっと危なそうね。不老不死でさえ殺せてしまいたい程に。」

確かに殺せるけどさあ…

「そんなに試したいなら…」

・本気見せてやるよ。

永琳が再び矢を放つ。

それが決闘開始の合図だった。

## 里の決闘（後書き）

…

静かな部屋。

壁に矢が突き刺ささっていること以外はいつも通りの広い教室。

すっかり暗くなった部屋で私は赤い瞳をみた。

そいつは私に気がつく素早く外へ出た。

私が追いかけて外へでたとき、月明かりで見えたそいつには角があった。

尾があった。

見覚えがあった。

そいつは空を見ていた。

夜空に鮮やかな弾幕が広がっていた。

気がついたら先生はいなかった。

…これが里の子供の証言である。

被害は出ていないが、子供達がひどく怯えている。

…この異変は残さなければいけないが、残す《べき》なのか？

永遠亭にて。

「ほら！早くシネよ！」

非情に、非常な温度の炎弾が広がり、輝夜を指して飛んでいく。

輝夜は何かかわし続けるが、全く余裕がない。

（…いつもとは全く弾幕の濃さが違う。このままだとかなりマズい。）

「何だよ？いつもの威勢はどうした！」

背中に炎の羽を宿し、実に楽しそうに弾幕を打ち続ける妹紅。

その様は正に一方的と言って良いだろう。

（狂ってる…）

まともによって勝てる訳が無い。こんな時は…）

「あなたこそ何時もの威勢はどうしたのよ。」

メンタル面をつく。

「ちょっと皆に期待された程度で狂うなんて…ばかばかしい。本気でかかってきなさい。」

少し余裕を見せて相手を笑う。

余裕を見せて挑発したのはいいが、正直かなり戦力が足りない。

（八雲は言いたい事言ったら逃げ出したし…）

《滅罪「正直者の死」》

「なに…これ!？」

「アハハハ!…さあ!早くシネよ!！」

輝夜の目に映ったのは最早元のスペルの原形を留めていない弾幕の群だった。

一瞬だった。

「姫様!」

妹紅の姿は愚か、てゐや優曇華の生死すら確認出来なかった。

その瞳には巨大な弾幕しか映っていなかった。

能力を使う以前に指一本動かせなかった。

「あ…あ…あ…」  
何も言えなかった。

余りにも圧倒的な、無慈悲な一撃に見ていることしか出来なかった。

「あああああああ…!!!!!!!!」

竹林に叫びが響きわたる。

「ほら…。父上の苦しみを味わえよ。」

炎を操り、輝夜を焼いて遊んでいる。

輝夜は自分の再生能力によって死ぬ事を許されず、再生と燃焼は繰り返している。



それは想像を絶する苦しみ。

「姫様！」

動けない。怖いんだ。死ぬのが。何も出来ない。自分は弱すぎる。てゐと逃げるしか…

「姫様！」

後ろで隠れていたてゐが駆け出す。

「てゐ！」

てゐは一直線に妹紅に体当たりをして攻撃を中断させる。

同時に炎弾に踊らされていた輝夜が解放され、地面に倒れる。

「姫様！」

体が動く。ゆっくりでいい。姫様の所へ。

ドサツ

何か倒れる音。

輝夜に近づいていた足元に、小さな影。

「…てゐ。」

知らない内に視界がぼやけてきた。

「てゐ…ごめん。私…何も出来なかった。」

「なに言ってるんだよ、鈴仙。まだまだ始まったばかりだよ。」

「てゐ！？」

・良かった…まだ息が…

改めて診ると、かなりの傷を負っていることが分かる。

・私だって医者の子だ。ある程度の事は分かる。

「てゐ…ごめん。私には何も出来ない…」

何か熱いモノが頬を伝い、てゐの顔にぶつかる。

「なに泣いてるの？鈴仙には、泣く前にまだやることがある。そうでしょ？」

・そうだ。私はまだ何もしていない。何かする前から無理だと決めつけて、逃げ出して。

てゐをソツと寝かし、立ち上がりただ前を見据える。

・私にだってまだ！

「妹紅さん、あなたを止めて見せます。」

永遠亭にて。(後書き)

永遠亭と博霊神社付近担当の監視員との連絡が途絶えた。

全くといって良いほど情報が無い。

未だに夜空を弾幕が飛び交っているくらいか。

まだ妖怪は来ないのだろうか？

柊氏の話だと、日没後には来るはずなのだが。

何にせよ、里の警戒態勢は変えられない。

いつ来ても可笑しくないからだ。

今、八意永琳と柊氏が戦闘している以上、里の守りは薄い。

私には不安に感じられてならない。

遠い昔の出来事。 零・弐。

…母さんが死んだ？

「ほら、あなたの出番よ？」

どうやら戦えと言っているようだ。

そこから先は -

ドスッ。

余り覚えていない。

母さんを殺したそいつを切り捨てた事しか。

どこから刃物を出したのか？

どうやって距離を詰めたのか？

覚えていない。

「うわああああアアアアア！！！！！！」

殺した。僕が他人を殺した。

そこには、2つの死体と叫ぶ少年。

そして不敵に笑う美女がいた。

思えばただの夢だったのかも知れない。

何もかも…

嘘だったのかも知れない。

お母さんは死んでいないかも知れない。

いや。

お母さん何て…いなかった？

こうして僕は、《俺》を作った。

こうして僕は《幻想》を作った。

遠い昔の出来事。零・弐。(後書き)

…ちょっと良いかしら？

何か？まだまだ始まったばかりよ？

何故私にこんなものを？

こんなもの？

いくらあなたでも許さないわよ。

いや、言い方が悪かったですね。

この男は一体誰ですか？

…

幻想郷の方では無いですね。

そう。私は彼…いや彼らを利用した。

何故？

彼が間違いなく最強だったから。

最強…だった？

ええ。私は愚か、閻魔でも勝てないでしょう。

…

あなたに頼みたい事があるのよ。

## 反撃開始。

…私は死んだのか？

…体が重い。思うように動かない。

そんな中で動かせるのはまぶただけ…

此処は何だ？気色悪い場所だな。

てっきり白玉楼にでも行くのかと思っていたのに。

全面紫色にギョロギョロと動き回る眼。

…待てよ。

もしかして此処は紫のスキマの中？

いや、違うな。

目の前にスキマが広がっているだけだ。

「あら。魔理沙、元気無いじゃない。」

全く、どんなタイミングで出てくんだから…

「紫……」

「全く、あなたらしくもないわね。」  
辺り一面がスキマに包まれる。



「こんな霊夢で手こずらないですよ。」

目の前のスキマからゆっくり表れるのは、やはりスキマ妖怪である紫。

「…モドキって偽者って事か？」

私はもう動けない。

それでも、知りたかった。

「いいえ。あれは間違いなく、霊夢。」

先ほどまでの微笑は消え、真剣な空気が漂う。

「…どういう事なんだぜ？」

「私の口からは言えないわね。」

…そんな事より、あなたは何をやっているの？」

私？何か変な事しているだろうか。

「あなたは本当に、やられたの？」

？

何だか、体が軽い？

体が動く。

「お？お？」

体を動かして調子確かめてみる。

不思議だ。

全く痛くない。

「私からのヒントはこれだけよ。」

紫は背を向けてスキマに入っていく。

「紫！」

…ありがとな。」

紫は少し驚いた様子で魔理沙を見ると、すぐにまたスキマに向き直り、ひらひらと手を振った。

「ま。頑張りなさい。」

周りのスキマが消え、視界は紫色から暗い夜の空へと。

見据えるは見慣れた敵。「さあ、反撃開始だぜ？」

反撃開始。（後書き）

「紫様。危機の報告、全て終了しました。」  
暗い博霊神社の縁側。

「ご苦労様、藍。」

何か考えながらスキマを覗いているようだ。

「霧雨：魔理沙。ですか？」

「ええ。ちょっと…気になってね。」

そついった紫の表情はどこか哀しげで、憂いを秘めていた。

「幽々子様は一度神社へ来るそうですよ。」

…

一瞬紫は驚いたような顔をしたが、すぐに「そつ…」と言ってスキマに集中した。

藍はそれをじっと視ていた。

発狂。

・ビュン

「あっ…ぶね」

とつさに首を右にそらして飛んで来た弾幕をかわす。

「…ちっ」

地に足を着けて、弾幕を放った本人に目を向ける。

ちよつど弾幕も尽き、永琳も降りてくる。

そして向き合う形に。

「戦闘中に悪いけど、一つ聞いて良いかしら？」  
構えていた弓を下げる。

・何故攻撃して来ないの？

…決まってるだろ

「殺し合いじゃあ無いからね。ルールも知らないゲームでいきなり斬りつけてもね。」

ゲーム？

弾幕ごっこの事か。

そんなものを気にする余裕があるとはね…

「いいわ。ルールを決めましょう。」

永琳が少し楽しそうにルールを話そうとする…だが。

ものすごい地響きと共に里の土壁が吹き飛ぶ。

!!!!!!???????

いつの間にか、里の外まで来ていたようだ。

八意永琳が弾幕で誘導してたのか…全く気付かなかった。

とにかく、今壊されたのは里の土壁。

つまり、里の中から壊された事になる。

内側から…しかも、アレほどの威力。

こんな事が出来るのは…

「上白澤慧音か…!」

案の定、崩れた土壁跡からでてきたのは慧音だった。

ただし、何時もの教師の面影はない。

その髪は薄く緑に染まり、角が生えて尾まで付いている。

「初めは何のコスプレかと思ったが…」

あれが報告書にあったハクタクというやつか。

目を伏せて考えていた。

そのたった一瞬の間に

奴は目の前にいた。

「…っ！！！！！！？？？？？」

目にも留まらない速さで振り下ろされた爪を刀でなんとかしのいで、  
刀ごしに見る周りの状況。

いつの間にか目の前からヤツは消え、永琳に同様の攻撃をくらい、  
防ぎきれずに肩に傷を負っている。

…なんだ？コイツは？どうなってる？

発狂。(後書き)

「あら、今日は。というよりあなた達にとっては今晚は。だったかしら?」

独特なゆつたりとした話し方。

「幽々子様。私達の世界でも今晚は。ですよ?一応。」  
まるで私達の世界が昼夜逆転しているかのような挨拶に一応突っ込みを入れておく。

「あらあ、そういえば、そうだったかも知れないわ。」  
この笑みを見ていると怒る気が失せるのは何時ものことである。  
それがいいところなのだ。

「いらつしゃい。幽々子。まあこの神社は私のものではないけれど。」

言うのは間違いなく、紫様。

幽々子様のご友人である御方。

私達はこの方に…

- ねえ紫?

- 何かしら?

- 早く、帰ってきてくれない?

- …

早く消えないと、殺すわよ。



## 発恐。

息が苦しい。

まるで相手に首筋を掴まれているような、そんな錯覚に陥る。  
それ程までに不老不死の狂気は凄まじかった。

「私の…私は…ちがう！…あははははは！！！！！！…？…？…？」  
泣いていたかと思うと突然に笑い出す。

狂気は感情の波が乱れて起こる。

私は「波」を操ることはできる。でも…

感情は動かせない。

例え動かせたとしても、あれほど狂っていたら…  
どちらにせよ私に出来ることは

「師匠…」

時間を稼ぐこと。

次の瞬間、鮮やかな炎が竹林を舞う。

- 人間の里。

「八意！！」

なんだこいつは？

早すぎて全然詳しく《見る》ことができない。

- 刹那。

ヤバイ！！！！！！？？？？？

永琳の目の前にいたアイツはもう、柊の目の前でその手を振り上げていた。

- 伏せて！！！！！！-

反射的に身体が動き、無防備にも地に伏せる。

直後、攻撃を外した慧音に鮮やかな弾幕が襲いかかった。

不意を突いたが、信じられない速さで一撃も当たらずに回避される。

その動きに驚かされるが次の瞬間、柊は更に驚く事になる。

...

弾幕を放った本人は

「...どうなってる？」

「私も驚いてます。心底。」

- 上白澤慧音だった。

「…弾幕か。久しぶりに見たな。」

しゃべった！！！！！？？？？？

…そりゃそうか。

「あなたの目的は何？」

慧音。

「あなたは私で、歴史を食う妖怪。それが全てであり、答え。」  
慧音？

「私にとって大事な夜。」

他の奴らには、要らないわ。」

どうやら、今夜を無かった事にするつもりらしい。

…どっかの巫女に同じ様なこと言った気がする。デジャヴってやつ？  
何にせよ。

「コイツには先生が個人的に補習しなきゃいけないみたいね。」

一步。

右手で帽子を掴む。

一步。

帽子を柔らかかな、草の上へ投げかける。

一步。

帽子に釣られた視線を慧音に戻す。

そこにいたのは、紛れもないハクタクだった。

ゆっくりと立ち上がり、服に付いた土を軽く払う。

慧音は一步ずつ歩んでくる。

すれ違う瞬間。

「永琳と、永遠亭方面をお願いします。これは《私達》の問題なので。」

決意に満ちた、真っ直ぐな眼だった。

だからこそ、信じた。

元の世界にはこんな眼はいなかったから。

「死ぬなよ。あんたは必要な人間だ。」

僕とは違って、という言葉は飲み込んだ。

発恐。  
(後書き)

…誰か

私を

殺して。

## 狂気。転。展。添。

鮮やかな炎が竹林を舞い、パチパチと音をならしながら、辺りに燃え移り、そこは正に地獄絵図と化していた。

幸い、てみると輝夜の周りには竹が少ない。

それでも、燃えた竹から発する黒い煙が危険を感じさせる。まるで、死神の鎌が二人の首筋を狙っているかの様に。

…一人は切られても死なないだろうが。

…？

覚える一つの違和感。

しかし、そんな違和感なんてないとも言わんばかりに舞い躍る弾幕。

「これじゃあ近づけない！」

近づく方法を探していたとき

優曇華は、違和感の正体に気づいた。

輝夜は不死であり、何時もの殺し合いで痛みには慣れてはいるはず。

なのに彼女は動きもしない。

妹紅さんにやられたにも関わらず、だ。いつもなら直ぐにでも立ち上がり、殺しに行くのに。

おまけに、てみにも言えることだが、弾幕を食らったあとはあるが、服が全く焦げていない。

「これは…まさか…」

- 突然。

視界から…いや、感覚的には五感から炎が消えていく。

その輪は徐々に広がり、燃えた筈の竹が元に戻っている。

そのいくつかは何故か戻らないが…

そんな光景に我を忘れていたとき

「ほら、意外と直ぐにバレたでしょ？」

- ?

「やっぱり鈴仙はまだまだだね。」

…てゐ？

「あなたには負けるよ…。いつも。」

- どこからか、聞こえたその聲は

「さあ、遊びはここまでよ。」

- 間違いなく、聞き慣れた

「今までも本気だったけど^^；

…ウソウサ」

- 因幡てゐと…

「狂気はまだまだ始まったばかりよ？」

- 何故か、自分の聲だった。

狂気。転。展。添。(後書き)

道無き道を全力で走る。

ザッザッザッ…

単調なリズムしか聞こえない。

と

「あのウサ耳の能力って何なんだ？」

朱髪の少年。

「?。《波》を操る…だったと思うけど。」

…なるほど、ここまで自在なのか。

彼には《視えて》いた、錯覚で作られた竹林と…

無数の不自然な波が



## 巫女の居ない博霊神社。

殺す。という単語によって生まれた静寂。

博霊神社の縁側で発生する殺気。

それは八雲紫の友人（人といえば語弊があるかもしれないが）であり、亡霊である西行寺幽々子から発生したものであり、あるうことかその矛先は紫だった。

「…もう私を殺しにきたのかしら？」

「ええ。と幽々子は答える。

「私は友人であるあなたに頼まれて、あなたを殺しにきたのだけだ。ど。」

紫はふう、と短く息を吐いて

「そうだったかも知れないわね。」

と、スキマを覗きながらもどこか遠い所を見る用な顔をしている。その目はどこか寂しげな色を覗かせていた。

「だったら、私を殺さなきゃね。」

静かで静かな神社の縁側。

「安心しなさいな、紫。貴女も知っている通り、私の能力なら楽に死ねるわよ。」

・西行寺幽々子。亡霊である彼女の能力は死を操るもの。その矛先を向けられた者は…

「サヨナラ、ユカリ…」

- シヌ。

放たれた能力。それは散りゆく桜の雨のように、避けようがない

- ハズだった。

「八雲藍!？」

そう、彼女が幽々子の手元を狂わせた。

軽く叩くだけだけれど、確実に能力を標的から外す一撃。

幽々子は怯んで動けない。

無理もない、一撃で終わるハズだったのだから。

その隙に…と開いてゆく一人分程のスキマ。

「逃がしません!!」

駆ける距離、およそ10メートル。

庭師兼剣術指導者の半人半霊、魂魄妖夢にすれば、一瞬とも呼べる距離。

振り上げる刃。

そのままなら紫は死んでいたはずだ。

しかしその刃は今、止められている。

「誰が逃げるなんて言ったのかしら？」

クスクスと口元を扇子で隠し、笑う紫

「くっ…」

一度引いた方がいいと判断し距離をとる。

「…貴女は誰ですか？貴女のような方は見たことはありませんが、」  
刀をその爪で止めた張本人。

「酷いこと言うのね。あんなに遊んでたのに…ねえ？」

？

どう見ても年上の女性。見た目など役にたたないが…  
遊んだ事など・

「橙。」

!!!!!!!!!!???????

巫女の居ない博霊神社。(後書き)

…誰しも読んでいる。

幻想郷の妖怪、人間、さらには動植物さえも読んでいる。

貴女も貴男も此処まで見ている。

《逢人禄》。あの書を。

幻想郷の汚れが綴られたあの書を。

しかし、誰も気づかない。

誰も読めていない事に。

この書はとある妖怪の協力の元に綴られた記録である。

しかして誰も本意には届かない。

…届いてはいけない。

- 稗田の遺した言葉。

## 逢人禄

「なるほど、なるほど。これが逢人禄の原本ですか。」  
夕暮れ。

そうとしか表現出来ないような景色を背景に、彼女達は話していた。

「ええ。この書は皆が知っていた通り、あの時の異変が記録されている。」

答えるのは書を引っ張り出した本人。  
金髪のロングに似合う美しい顔立ち。

「なかなか興味深いですね。」

「しかしこの本。我々天狗が全く出て来ないんですよ。」

そう。驚いた事に、あれほどの事件が在ったらしいのにもかかわらず、山の天狗が一切関与していないらしい。

「あら、自分達の事は自分達が一番よく知っているんじゃない？」  
「もつとも」

「しかし、おかしい話です。その二晩の出来事を誰も覚えていない、  
だなんて。」

「そう、私もあまり覚えていない。  
あの二晩の事だけは。」

「でも」  
「貴女には、真実を伝える記者として、いいことを教えてあげましょう。」

「覚えていることも、ある。」

「何ですか、それ！いいネタになります？」「興奮気味の天狗に、

「まあ、記事にするかは任せるわ。」

「ちよつと意地悪。」

「実は、逢人祿には……」

逢人禄  
(後書き)

逢人禄。

それはある、一つの異変の為に書かれた書物。

著者は不明。おそらく、稗田の者であると考えられるが本人は否定。

…なんでも、記憶にないとか。彼女の書物には、いつもどおりの日常が記録されているだけ。

しかし、それよりも不思議な事は異変に関わったとされる者にすら記憶が無いこと。

- それでも異変があったと言える理由は

《柊祐介》

彼の存在。

巫女？のいる博霊神社。

- 橙？

この女性が、橙？

「信じられませんか？無理もありません。」

- もう、大分昔の事なので。

…

「どちらにせよ、幽々子様の邪魔をするというなら」

- そう。邪魔なら…

「斬り捨てます!!」

- 例え友人を殺すのが目的でも。

「待ちなさい、妖夢。」

突然背後からかかる制止の聲。

- なっ!?!?

突然過ぎて、転倒してしまいそうになりながらも後ろを振り向く。

「私達は、白玉楼に帰りましょう。」



「ええ？」

ポカンとしている内に幽々子は先にふわりと背を向けて飛んで行ってしまふ。

「解らない。」

こうなったら聴かないのは知っているので、渋々後に続く。

「どれだけ傍にいても、本意が。」

「どうしたんです？幽々子様？」  
当然、問いかけるしかできない。

「……」

…

「妖夢。分からなかったかしら？貴女、死んでたわよ。」

「？確かに半分死んでる様なものですけど……」

…

「同時刻。」

《スターダストレヴアリエ》

「ふふ……」

少女は手をかざす。

・バシユン！！

すると、眼前に広がる弾は光を失い、突如として消える。

霧雨魔理沙は試していた。

「…霊夢。それ、卑怯だぜ？」

消えた弾を見て呟くように問いかける。

そう呟くのも無理はない。

彼女の放つ弾は全て別次元に飛ぶように消えてしまうのだ。

「私のあらゆるものを飛ばす程度の能力。これが卑怯だと、言いたいのか？」

…なんだ？《飛ばす程度》？

おかしいぜ。あいつの能力は《空を飛ぶ程度》だったはずだ。…つまり

「分かったぜ、お前ニセモンだな？」

ビシッと指を指して。

「霊夢は《空を飛ぶ程度の能力》だ。能力は変わったりしないぜ。安心と信頼のどや顔。」

「ふふ…。魔理沙は昔、魔法を使う能力なんてイヤだ！って神社に来たこと、あったもんね。」

・少女は語り出す。

「あれからしばらくは能力を無くすような魔法、研究してたでしょ。」

「  
- 何故か嬉しそうに。  
戦闘なんて忘れたように。」

「おい…。」  
余りに楽しそうで、ツツコミすら出来ない。

「結局分かんなくて。  
色々調べてる間に楽しくなって。  
商店追いつかれてまで…」

そろそろ魔理沙の恥ずかしさが頂点に達しそうになった頃。

- 空気が、変わる。  
「あの頃は楽しかった…本当に…」  
!!!!!!!!!!!!??????  
- 直後。大地が、揺れた。

「…かはっ…。」  
息が、出来ない。  
何をくらったのか全く解らない。  
というより、考える暇がなかった。

(…意識が、無くなる。)

- あら、霊夢じゃない。  
- 今晩は、霊夢さん。

- 紫？まだ引き上げてなかったの？

「ちょっと、邪魔が入りまして。

「ふーん…。兎は？」

「今から回収よ。もう時間がないわ。一応目的は果たしたしね。

「了解。じゃあ行きましょ。

「直後、何度か聞いた独特の音を聞き、そしてなにも聞こえなくなつた。

巫女？のいる博霊神社。（後書き）

？

肌で感じる違和感に閉じていた目を開ける。

其処には、いつもどおりの幻想郷ではなく、炎が彼方此方にあり明るく照らし出された幻想郷があった。

「何はともあれ、帰って来れたわけね。異変の方は片付いているのかしら？」

- お腹すいたから、ご飯食べた後にでも確認しにいくかな。みたいなだらけた発想をしながらとりあえず神社の方へ。

振り向：

「…へ？」

崩れた神社。その中心は此処、縁側に。

何より彼女が驚いたのは…

「- 魔理沙？」

ボロボロの親友の姿だった。

## 異変終結？

「…ここまで、ですか？」

記者は問う。

「ええ。この先の出来事は一応記憶しているけれど。」

…おかしい話だ。

「私もこの先の出来事は永琳さんや鈴仙さんにお伺いしました。結局、魔理沙さんは入院。後は…」

「…蓬莱山輝夜、藤原妹紅、稗田阿求の行方が判らなくなっている。少なくとも、ね。」

…ですね。

と呟いて、思考を開始する。

まず、この異変の事…つまり柊祐介なる人物が幻想郷に来た辺りから明確な記憶を持つ者はいない。

次に、この書の詳細は不明。作者、意図、正確性に至るまでなにもわかっていない。

題は《逢人禄》。茶の表紙の後には多くの出来事が記されている。更に後にはまだ白い紙が残っている。

次に、《柊祐介》。

…彼が分からない。特徴は赤い髪らしい。

らしいというのは、そのような人物は知らないからだ。別に、私が関係していない異変だから。とかは関係なく、幻想郷中に走らせた鴉でさえ見つけられない。

そして、行方不明。

《蓬萊山輝夜、藤原妹紅、稗田阿求》の三人はこの書の翌日である  
う日から姿を消している。更には、魔理沙の怪我。

同日に治療を受けている。

ここまで事実が揃っていれば、異変があったことは間違いない。

しかし、この本…逢人祿。

信用していいものか？

とところどころの誤字脱字。

謎の視点。ついには意味の分からない話が入っていたりと、訳がわ  
からない。

「…もう質問はいいのかしら？」

マズい。思考にふけてインタビュー中なのを忘れていた。

「二つ、いいですか？」

どうぞ。という返事を聞いて続ける。

「貴女は柊という方を知っているのですか？」

- NO

「じ、じゃあ能力は二つなんて持てるんですか？」

- NO

「じゃあ貴女はこの本はデタラメだと言つのですね!？」

「…質問は二つだったはずよ？それでは。」

あ…

「文様？インタビュー終わりました？早く帰りましょっつ？」

「最っ悪…」

天狗は自分のミスにずっと頭を抱えていた。

真っ昼間の無縁塚付近だった。



異変終結？（後書き）

真つ昼間。とある家庭で。

「紫様？どうしてこんなびゅうで本当の事、いかなかったんですか？」

「橙…！」

「あら、やっぱり見てたの。貴女達は忘れてしまったものね。」

「まあ、仕方ないんじゃない？許してあげなよ。俺達が教えて無いらだから。」

「そうね。一度関係者全員を集めて《必要な事》を教えないといけないわね。」

「必要な事、ねえ…！」

此処までで一部は終了です。

話の構成を一度まとめたいと思うので、またしばらく更新は止まると思います。ご了承下さい。

駄作をここまで読んでいただきありがとうございます。

二部の方も書きますのでまたみていただけると幸いです。まだ謎が解けてないです。

でわ。m ( ) ( ) m

これからの、未来。

・約7時、博霊神社。

「どつやら、全員集まったようね。」

日も落ちて、薄暗い闇に包まれた境内に集まっている人数は6人。

「とりあえず、集められた理由を聞かせて下さい。」  
慧音が紫に尋ねると、全員が首を縦に振った。

「簡単に言うと、あるものを渡すためよ。」  
紫は答える。

「…あるもの？」  
永琳。

「ええ。詳しい話は…柊。」

「じゃあ要点だけまとめ。時間が無いので一回しか言わない。質問は最後…いいね？」

少し変わった雰囲気の中、全員が頷いた。

「今回の事件についてだが、まだ終わっていない。だが、俺には終わらせることが出来る。」

そのためには、俺は…いや、この幻想郷は消えなくてはいけない。」

!?

「その前に、渡すものがあるんだ。」  
そういつて柊は何かを取り出す。

「…なにこれ。」

霊夢は怪訝そうにソレを見ながら尋ねる。

どう見ても、それは…

「カエルの腕輪だよ。安心しな、ちゃんと人数分あるから。いや、5個しか間に合わなかった、と云うべきか…」

「そんな事を聞いてんじゃないの！」

霊夢は、10円程の大きさのカエルの細工を施した緑の腕輪に何やら2Pがなんとか、巫女がなんとか呟きだした。

「この腕輪は、簡単に言うと記憶を守る物だ。」

柊は、説明を始める。

「記憶を…？まだ年寄りじゃないわよ、私は。」  
といつて、後ろにいる皆をみる。

居るのは、柊、紫、永琳、慧音、幽々子、霊夢。  
当然、霊夢の背後から殺気が放たれる事になる。

「落ち着けよ。さっきも言った通り、この腕輪は記憶を守る為の物だ。」

「だからなんで必要なのよ。」

あくまでも、背後はスルーで進める。

「幻想郷を現世にぶつける。その際、幻想郷の記憶を住人から奪う。」

「…ぶつける？」

管理人である霊夢からすると聞き逃せない表現。

「そ。まずはその理由から説明する。」

そして、柊は話を始める。

今回の異変は、同時存在する幻想郷からの攻撃だと言つこと。

あちらの世界は、戦闘に特化していてまともには戦えないと言つこと。

そして・

「幻想郷を現世にぶつける事で…逃げる。」

・その弱気な発言に、

「幻想郷を無くすの…?」

・少女は、苛立ちを隠せない。

「逃げるなんて、らしくないわ。私は絶対に反対。」

「だから落ち着けて、話はこれからだ。」

そういつて柊は霊夢を修める。

「逃げると言つても、負けてやる訳じゃない。まず、一旦引いて、敵を探ろうと云うだけだ。」

「敵を探る…?」

他の面子をみるに霊夢だけが、理解をしていないようだった。

「攻撃はされたが、奴らの目的が分からない。それが理由だ。理由も分からず戦いなんてやるもんじゃない。どっかの巫女や魔法使いのようにはな。」

・ギクツ。

「話はそれだが、相手を調べるまでの潜伏期間を得るために、幻想郷をぶつける訳だ。分かったか？」  
「通り、説明は -

「あ、そうそう。この腕輪は幻想郷をぶつけた際に記憶が吹き飛ばすのを防ぐ為につける。」  
終わったようだった。

これからの、未来。(後書き)

その後の質問。

腕輪を付けていない場合はどうなる？

幻想郷が現世にぶつかると、世界は一番安定する形にあるとするため、幻想郷より安定している現世に合わせようとする。

つまり、腕輪を付けていない場合、幻想郷での生活を忘れ、現世の記憶が生まれる。

ぶつけた後はどうなる？

幻想郷は消滅し、各地に散らばる。

どうやって情報を集める？

紫と幽々子、永琳が担当。

俺達の課題は、散らばるであろう幻想郷の住人を一つの場合に集める事。

あなたの腕輪が無いようだけ…？

…。

## とある日常

・・・少し、寝てしまっていたようだ。

おそらく明日から始まるテストという恐ろしい人間の習慣？の為の勉強のせいだろう。

机にむかっているうちに・・・と言うことのようにだ。

「ん。。。」

少し伸びをして、周りをなんとなく見渡す。

ここは自分の部屋。

今日は特におかしい所はないようだ。

今日は、というのは、たまにおかしいことがあるわけで・・・

「お邪魔するぞ！」

・・・こんなふうに。

・・・誰だろうこの子。

勝手に部屋にいる時点で、アレ、確定なんだけど。

「お前も、妖者か？」

なんとなく聞いてみる。

答えは、分かっているのに。

「そうだ！あたいはさいきょーの妖精さ！」

今日は妖精・・・か

昨日は・・・金髪の妖怪に食べられそうになったんだっけか。

「それで？何の用だ？」

まあこれも大体分かってるんだけど。

「遊べ！」

・・・だと思った。

「悪いな、明日はテストというイベントがあるから、今日は止めてくれ」

目の前で胸張ってた妖精に言う。割と切実に。

「テスト？なんだそれ？」

思いっきり首を傾げて聞いてくる。

うらやましい。

妖精や妖怪には無いらしい。ってどっかのアニソンの歌詞に・・・

「勉強の成果を見せるんだよ」

至極簡単に説明した。つもりだった。

「よくわからないけど、かくれんぼしよう。あたいはさいきょーだから、見つけられないよ！」

じゃ といって窓から外へ。

ふと時計をみると0時00分。

正直、外にでるのは怠い。

だから



「。じりり」  
寝た。

とある日常（後書き）

・・・紫様？

何？

これで、良かったんですよね？

知らないわよ。

え・・・

あの子がそう望んだの

そのためだけに、幻想郷を消したんですか？

藍、アナタはなにも知らない。

・・・

藍には仕事を任せてあったはずよ？  
それが終わったら・・・ね？

・・・分かりました。

狐は歩く。巫女を探す為に。

## テストと俺の日常。

早朝。

けたたましく鳴り響く目覚まし時計。

目が開く。

「・・・最悪だな」

今日はいつもと同じテンションではいられないだろう。

・・・主に、凍っている部屋に寝ていた、という事実のせいで。

俺の名前はxx。

不思議なことに、妖怪の類のものを見ることが出来る。

いつ見えるようになったかは覚えていない。

それに、基本的に見分けはつかない。

だからあまり他人とは話さない。

家にこもりがちだったりする。

家には誰もいない（親の顔も知らない。）し、何より妖怪と話して

も誰も気味悪く思わない。

あまり妖怪も好きではないが。

凍ってなかなか開かないドアを気合いでこじ開け、正面の階段を、降りる。

一階に着くと、真っ先に机の上に目をやる。

少し溜め息をついて、着替えなどの準備をし高校へと向かう。

少しおかしいが、これが俺の日常だ。

今日とはびきり溜め息が大きかった。  
理由はわかると思うが、部屋の氷だ。  
誰も家にいない自分にとって掃除は普通にめんどくさい。  
机の上に目をやる理由？  
そんな事は決まってる。弁当が置いてあるからだよ。

なぜか・・・ね。

ふと昨日の少女を思い出す。  
なぜ彼女は家に来たのだろうか。

おっと、駄目だな、これ以上は。

「あまり妖怪に入れ込んで良いことはない。  
あの時も」

「お！××じゃないか！おはようさん。」

「お、健一か」

「お前が早いなんて珍しい。何かあったか？」  
コイツは健一。地味な俺とはちがってイケメン、頭脳明晰、運動神経抜群、性格も良いという完璧人間。  
なぜか俺なんかと関わってくれる。

「今日、テストだろ？早く出て勉強でも・・・とと思って  
それに、家だと寒いし。」

「そっかあ、じゃあ手伝おうか、勉強。」  
良い奴だろ？

でも、目のことは話してない。

話す予定もつもりもない。

これは夏休み明けの俺の気持ち。

テストと俺の日常。(後書き)

ん……

闇から聞こえるうなり声。

「見つけれないからって、寝るな〜!!」

闇は凍りつく。

中心で寝る少年はそれでも起きない。

友達に面白い奴がいるときいて来たんだけど……

「……見つけれないのかな」

明日なら、遊んでくれるよね？

妖精は、一人。

暗い夜に一人だった。

一人、想っていた。

## テストと、とび蹴り。

テストが終わった。色んな意味で。

健一にみてもらったお陰で最低ラインはとれている・・・はず。

しかし、それは自信と言うには程遠い。

全部あいつ（部屋に入り込んで邪魔してきた妖精）のせいだと考えた所で、自分の中で反省会が始まった。

よく考えたら、前日以外勉強していない。

よく考えたら、すぐ寝たのは俺。

よく考えたら、妖精が怒ったのも当たり前な訳で・・・

そんな事を考えながら、健一と別れた後の帰り路についていた訳なんだが・・・。

後ろから、

「とりゃ。」

突然蹴飛ばされた。

「どくあ!?!」

変な声を出しながら吹き飛ばす俺は他の人からみればさぞかしおかしく見えただろう。

おそらく、この蹴りは「人」のものではないだろうから。

テストと、とび蹴り。(後書き)

俺には、家族がない。

親の顔すら知らない。元からいたのかさえわからない。

ずっとそばにいたのは、厄介な「人間じゃないもの」だけ。

他人には、いえない。

妖怪が見えるだなんて、君も気持ち悪い。そう思うだろう？  
そういうことだ。

俺は、妖怪の類が見えるからといって、いいことはないとおもう。

俺にとっても、妖怪にとっても。

たまに思うんだ、俺はどっちの「者」なんだろう、って。



氷と、夕日と、

「ててて…」

「さあ、あたいにあやまりな！」

後ろから後頭部を蹴飛ばされ、手をアスファルトについた状態。他の人間が見れば間違いなく土下座という言葉を思いだしていただろう。

いつつ…

と頭をかきながら視線を上げていくと、そこには予想道理の妖精の姿。

この妖精だったかはあまり覚えていないが、やたら青い奴だった気がするので確定する。

「今日こそは遊んでもらうからな！覚悟しろ！」

いやいや、そんなことや顔でそんな事いわれてもな…

そんな事を口に出そうとした瞬間

クスクス…

全く気付かなかったが、買い物帰りの主婦さんに見られていた。

一瞬、ひやっとしたものを感じたが、まだ

”会話”をしていない事に気がついて安堵する。

もし”会話”をしていたら、待っていたのは、きっと。

だから、俺は深い溜め息をついて、ほかの誰にも見られないように妖精に手招きすると、黙って近くの公園へと歩いた。

そこは、学校からは15分程離れた場所にある公園で、芝が敷いてある少し広めな場所だ。

学校が終わったこの時間帯に前を通る人はいても、入る人は絶対にいないという不思議な公園だ。

でも俺は何故こういう場所なのかを知っている。

妖が、いるからだ。

別に見えてる訳でも無ければ、妖が人を拒んでいるわけでもない。ただ、そういうモノなのだ。

「で、何のようだ？」

「遊びやすそうなとこだな。でかしたぞ。」

少しいらっとしたが、押さえるあたりが大人なのだった。

「遊びたいんだろう？じゃあここに居る奴と遊んでやってくれ。」

「そんな奴・・・あ」

妖精は公園を見渡すと、一点を注視した。

滑り台の下である。

＊＊にとっては見慣れた光景。

西にはえている広葉樹の隙間からのぞく夕日の光とどこかそれとよく似た少女の姿。

どこか儂い雰囲気をもたらりつかせ、彼女は滑り台の下に立っていた。

10歳前後に見える。

だが、＊＊は知っていた。

彼女は人間ではないという事実を。

青い妖精は滑り台の方へと歩みを進める。  
笑顔で。

だが、\*\*は知っていた。

彼女は、幸せにはなれないと言ったことを。

二が、遊ぶ公園から一は帰って行った。

氷と、夕日と、（後書き）

「ふう……」

一人、息をつく。

此処は、夢の跡地。

人達の夢が作り出した世界。

その跡地。

あれだけ賑やかだったのに、と一人思う。

彼女には、仕事がある。

夢を集める仕事だ。

跡地を再興する仕事だ。

それは、時として、冷たさを使う。

わかってはいても、辛い。

彼女には、仕事がある。

夢を奪い、2つを分ける仕事だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4122q/>

---

東方逢人祿

2011年11月17日13時05分発行